
アフタースクール ランデヴー

橘ツカサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフタースクール ランデヴー

【Zコード】

Z0183P

【作者名】

橋ツカサ

【あらすじ】

瑛香と紗綾は親友同士。瑛香はいつも紗綾のことを気にかけている。だけど、秘めた想いも手伝つて、ときにはそれが暴走し、見当違ひな方向へ行くことも。二人の少女が織り成す他愛もないお話。幸せって何ですか？

「理不尽だつ！」「

わたしは思わず口走つた。

下校ラッシュのピークも過ぎ、校舎に残る生徒はまばら。人気の少ない廊下は今、ある意味わたしの独擅場だ。

「どうしたの？ 瑛香。大きな声出して」

声の主は、隣を歩く親友の紗綾。つぶらな瞳が、こっちを不思議そうに見つめている。

冬の陽光は早くもかげりを見せはじめ、淡い日差しが彼女を美々しく彩つていた。

意図せず見とれて黙り込むわたしに、紗綾が小首をかしげてくる。

「なんでわたしらが、こんなことしなくちゃいけないんだよー！」

そそくさと目線を外すと、わたしは声を張り上げた。語氣の強さに比例して、身振りもついつい大きくなる。ふたりで持つてゐる二つ箱が揺れ、紗綾の華奢な体躯を翻弄した。

「ごめんなさい、つき合わせて……」

紗綾の表情がふつと沈み込む。普段にもましてか細い声。そこからは申し訳なさがひしひしと伝わってくる。憂いを帯びた端整な横顔は、もともと紗綾がまとっている儂げな雰囲気と相まって、まさに筆舌しがたいものがある。わたしは高鳴る鼓動を禁じ得ず、ただその表情に魅入られた。このままずっと見ていたい。でも、紗綾にこんな顔は、似合つているけど似合わない。

だらしなく緩んだ表情筋を引き締めると、わたしは水気を払う犬のようにフルフルと頭を振つた。

「ついて来たのはわたしのほうだ、紗綾はちつとも悪くない。わたしが不満なのは、なんで当番でもない紗綾が、ゴミ捨てなんかしなくちゃダメなのかってことなんだつ！」

力説するわたしを見て、紗綾が表情をやわらげた。

「だつてあの子たち、困つてたから」

用事があるというクラスメイトに頼み込まれ、紗綾は「いい捨て当番を代行するハメにったのだ。

「あいつらの用事つて遊びの約束だぞ。そんな頼み、きいてやる」となかつたのに

「でも、約束を守る」ことは大切よ。瑛香だつて、私が約束したのに来なかつたら嫌でしょう?」

紗綾がたしなめるような視線を向けてくる。

「うう~」

わたしは苦悶に顔を歪ませた。たとえの相手が紗綾じゃなかつたら、余裕で否定してゐるのに。

「だいたい紗綾は人が良すぎるんだよ。何でもかんでも頼みを聞いてやつてさ。嫌なら断つたつていいんだぞ」

「うん。でも、別に嫌じゃないから」

一人息巻くわたしに対し、紗綾が笑いかけてくる。

「紗綾がそう言つんなら……」

その聖女のような笑顔にあてられ、わたしのボルテージはみるみる急降下。それからは、ただ黙々と廊下を歩き続けた。

紗綾はもともと口数が多いほうじゃない。だから、わたしといふときでさえ、今みたいな沈黙がしそつちゅう訪れる。でも、そこににぎまずさは少しもない。むしろ、心地いいと言つてもいい。わたしたちの関係は、その時々の感情を口に出し、相手に共感を求めるような薄っぺらいものじゃない。そう自負しているからだ。

道々、下校する生徒たちとすれ違つ。通り過ぎる教室からは、居残つておしゃべりに興じる声が聞こえてくる。その表情から、声から、ひいては学校全体から、放課後特有の開放感が発せられていた。ただ、「ミニ集積場所に向かつて歩く、わたしたちを除いては。

(本当なら、わたしたちだつて……)

紗綾に負い目を感じさせないよ、わたしはここの中でため息をついてみた。

でも、ものは考え方だよな。その分、紗綾と一緒に過ごせる時間が増えるんだから。ひとり一ヤケながら、わたしは隣の紗綾をうかがい見る。

『意識は常に何ものかについての意識である』というのは誰の言葉だったつけ。何気なしに生活しているときにも、人はなにかしらの対象へ意識を向けているらしい。当然、こうして押し黙つている間も、わたしはあれこれと思いをめぐらせている。ふたりで一緒にいる場合、わたしの意識はたいてい紗綾に向けられる。それは今現在も例外じゃなかつた。

紗綾はいつも必要最低限のことしかしゃべらない。そのせいでも、言葉から伝わってくる意思や感情もそう多くない。でもそれは、何も考えていないつてことでも、何も感じていないつてことでもないんだよな、ただ口にしないだけで。だったら、その言外の気持ちを察してあげることが大切なんだ。そのために必要なのは、相手を自分に置き換えて考えるつてことだよな、やっぱり。紗綾もわたしも同じ人間なんだから考えや感じ方に大差はないはず。そうなると、さつきの言葉、あれは本当に紗綾の本心なのか？ わたしがつて本当に困っている人なら手を差し伸べてもいいと思つてる。だけど、今日みたいに他人の都合で煩わされるのは、はつきり言つてごめんだ。紗綾だって口では嫌じやないつて言つてたけど、実際は嫌なのかも、ただ性格的にそう言えないだけで。だったらこれは大変だぞ。本当は嫌なことを無理やり続けたら誰でもストレスが溜まる。ストレスを溜めすぎると心や体に異常をきたす。そしてそして、やうにそれが進むと……。

よくないイメージ映像が脳裏をよぎる。

（ああ、紗綾が、紗綾が！）

一瞬、田の前が真っ暗になり、その場に立ち尽くす。頭まで心臓がのぼってきたかのような動悸を感じる。変な汗まで浮かんできた。自我喪失の一歩手前。

だけど、わたしは踏みとどまつた。

(そんなの嫌だ！　わたしが紗綾を守るんだ！)

搖るぎない決意を持つて、わたしは紗綾に対峙した。

「紗綾！」

「どうかしたの？　そんな怖い顔して」

紗綾が目を瞬かせる。

「わたしは決めた！　もつ紗綾にこんなことさせるもんか！　紗綾が断れないって言つんなら、わたしが代わりに断つてやる。だからもう心配すんな！」

はじめキヨトンとしていた紗綾も、やがてわたしの意図を理解したのか、穏やかな笑顔をうかべた。

「ありがとう、瑛香。でも私、本当に嫌じゃないから」

「そんなわけないだろ！　いいから無理すんな！」

意固地に迫るわたしに対し、紗綾が少し困ったような表情をうかべた。

「つうん、本当よ。私、人の役に立てることがうれしいの」

「他人を気遣う紗綾の優しさはわかる。でも、紗綾はもっと自分自身のことを考えるべきだ」

「違うの。これは、自分のためにしていることだから」

「自分のため？　他人のために自分を犠牲にして、それで紗綾が幸せになれるのかよお」

「犠牲だなんて大袈裟よ。それに私、今でも十分幸せなの」

「そんなの嘘だ！　そんな幸せ、わたしは認めない！」

「それじゃあ、瑛香は幸せって何か知ってるの？」

「うつ、それは……」

言葉に窮したのと同時に、わたしに冷静さが戻ってきた。見ると、紗綾が悲しげに眉を八の字に寄せている。加えて、普段は透き通るような白い肌が、今はほんのり紅く上気していた。いつもと違うその様子を、わたしは固唾を呑んで見守った。

「私、幸せっていうのは、自己の満足の度合いで決まるものだと思うの」

言葉は発せられた。

「幸せが自己満足！？ それってどういうことだあ？」

理解が追いつかないでいるわたしの目に、必死に言葉をつむぎ出そうとしている紗綾の姿が映る。

「あのね。同じ境遇にあつたとしても、同じ刺激を受けたとしても、それをどう感じるかは人それぞれ違うものなの。たとえば味覚。味つていうのは甘味、塩味、酸味、苦味、旨味の組み合わせで構成されてるわ。そして、それはショ糖濃度、塩分濃度、酸度みたいに数値化することができるの。だから、ある人がおいしいと感じる味の条件を、すべての人が経験することは可能なのよ。でも、人によって好き嫌いがあるように、経験した人すべてがその味をおいしいと感じるわけじゃないでしょ。味を感じることと、おいしいと感じることは別の話なの。だから、特定の人がおいしいと感じる味を、すべての人にとっておいしい味だつて断定することはできないのよ。それと同じで、特定の境遇を幸せだと感じる人がいるからって、その境遇をすべての人にとっての幸せだなんて断定することもできないの。どんなに貧しくても、その生活に満足している人の人生は幸せ。逆に、どんなに裕福でも、その生活に満足していない人の人生は不幸せ。それって、幸せは本人がどう感じるかってことで決まるからだと思うの。だから、特定の条件を定めて、それを達成すると、その状態にあることは幸せそのものじゃないはずよ。もちろん、それは幸せを感じるきっかけになるとは思うけど。味を認識するこどが、おいしく感じるこの要因になるよ！」

わたしの憶見は見事に打ち砕かれた。

「そうだよな……。みんながみんな、同じことを同じように認識して、まったく同じに感じる必要があるんなら、そもそも個体化なんてするはずないもんな。『ごめんな、バカなこと言つて……』

「ううん、いいの。瑛香は私のことを思つて言つてくれたんだもの」紗綾の優しい言葉と微笑みに、わたしは照れ臭さを感じずにはいられなかつた。

「へへへ」

後頭部を搔きながら、わたしも紗綾に笑い返す。この笑顔の交換で、すべて解決問題なし。少なくとも、わたしたちの間では。「それにしても、すゞいじやないか。今みたいな調子で他のやつらとも話をしたら、きっとみんな、紗綾のことを見直すぞ！ それどころか人気者にだつてなれるかも！」

わたしは努めて明るく振舞つた。紗綾の望みが人の役に立つことなら、今以上に人と触れ合つことが大切なはず。だつたら、わたしはそれを後押しするんだ。ちよつと寂しいけど、紗綾はわたしの占有物じやないからな。

「だめ！ そんなことできない」

だけど、紗綾は急にうつむいて頬を赤らめた。恥ずかしがり屋の紗綾のことだけに、この反応は予測できただけど。

「なんでだよお。紗綾は人の役に立ちたいんじゃないのか？ だつたら『ミコニケーション』能力も必要だろ？」

「うん、でも……」

言葉を濁す紗綾。

「簡単なことじやないか。今、わたしに話したみたいにすればいいだけなんだからさ」

説得を続けるわたしに、紗綾がはにかみながらつぶやいた。

「だつて、瑛香は特別だから……」

「なつ！」

その言葉に、わたしの外の世界が凍りつく。

紗綾の言つ『特別』つて何だ？ 簡単な単語のはずなのに、今はその意味がわからぬ。もしかしてこの『特別』つて、あの『特別』なのかな？ これつてつまり、そういうことなのか！？

ドキドキという心臓の音と妄想とがいっしょに膨れ上がる。

なぜだろう……。目の前にいる紗綾が、さつきとはまるで別な存在のように感じられる。今の紗綾はすゞく、すゞく……。

「クリ。

わたしは生つばを飲み込んだ。その刹那、頭の中で怒号が響きわ
たつた。

(紗綾をそんな田で見んなー！)

理性の勘気をじつむつて、わたしはハツと我に返る。
そこには心配そうにわたしを覗き込む紗綾の瞳があつた。
うう……、その純粋な輝きがものすごく痛い。不純な欲望に囚わ
れていたわたしにとっては。

とにかく今は返事をしなきや。平静を装い、わたしは無自覚的に
言葉を吐いた。

「な……、なら、しようがないよなつ！」

あれ？ 紗綾の表情は曇つたままだ。なんでだ？
焦燥感にかられながら、わたしはあれこれ逡巡する。

考えてみたらそうだよなあ。あそこであんな返しをしたら、変に
思われて当然だよなあ。なんであんなこと言つたんだらつ……。

重苦しい瞬間の蓄積。自己嫌悪にさいなまれつつ、わたしは無言
の紗綾を見つめた。

「瑛香、もしかして怒つてる？ 私がわがまま言つたから……」

気弱な視線が紗綾から投げかけられる。

良かつた！ 違つた！ 小躍りする内心とは裏腹に、わたしはぶ
つきりぼうに言い放つた。

「怒つてなんかない。だけど、紗綾のわがままを聞いてやるのは今
回だけだからなつ」

「うん！」

パツと破顔する紗綾。その微笑みにつられ、わたしも無意識に笑
顔になる。

笑顔を交わしたわたしたちは、どちらともなく、またふたり並ん
で歩きはじめた。

わたしはホツ胸を撫で下ろすと、不意に感じた疑問を口にした。

「なあ、紗綾。でも、どうしてわたしが怒つてるって思つたんだ？」

「ん？ だつて瑛香。顔が赤かったから」

「ええっ！？」

指摘されてはじめて知る事実。そして今度は、自分でも顔が火照つていいくのが実感できた。

「ほら、またよ。大丈夫？ 具合でも悪いの？」
紗綾の顔に、再び心配の色がつかぶ。

「なんでもない、なんでもない！ これは、その……。とにかく、なんでもないんだっ！」

わたしは早口にまくしたてた。

「本当？」

今度の紗綾の表情には、あからさまな疑惑の念が宿つていた。
(わたしをそんな目で見んなーー！)

疑惑の視線に耐えかねて、わたしは顔を背け歩き出す。

「そんなことより早く行くぞっ！ こんなこと、もつもと終わらせて、ひとつと帰るんだからなっ！」

「あっ。待つて、瑛香」

紗綾が後ろから呼びかける。だけど、わたしは歩く速度を緩めなかつた。

「ごめん、紗綾。いくら紗綾のお願いでも、こればっかりは聞けないんだ。この顔の火照りが治まるまでは。気持ちの整理がつくまでは。

「」
ミミ箱伝いに紗綾を感じる、一生懸命わたしについてきてるのがはつきりわかる。その感覚に言い知れない充足感を感じながら、わたしはまた物思いに耽る。

紗綾はいつもわたしを幸せな気分にしてくれる。一緒にいるだけでここに満たされる。だけど、わたしはどうすれば紗綾が幸せになるのかわからない。紗綾が本当に幸せを感じているのかもわからない。わたしはわたしのこの手で紗綾を幸せにしたいの！」

夕闇迫る校舎の中、わたしは思わず口走った。

「こんな絶対理不尽だーー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0183p/>

アフタースクール ランデヴー

2011年6月30日03時25分発行